

明治三十一年十二月二十六日 第三種郵便物認可  
第五十九號 每月二回(日一、日五)發行  
明治三十三年七月十五日 發行

# 改教時報

第五十九號

社説

◎太平無事

論説

◎迷信

◎我邦維新以前の慈善事業

(承前)

安達 愚佛

◎帝國主義

鳳氣 至洪雄

雜録

◎先德餘香

(其六)

文學士 本多 高陽

信界

◎無我觀

佐々木 月樵

社會

◎現内閣の宗教法案に對する感情◎喇嘛僧の渡來◎阿訛婆羅摩に就て◎感化法施行細則の制定◎犯罪者と宗教◎教導講習院卒業生諸氏を送る◎紛々録

### 大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し其學徳を高めしめ又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り實業道德を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

### 政教時報

## 太平無事

兎角世の中は事なかれであるといふ詞は、我々が能く耳にする所である、實に無事は結構の事で、若し黄金世界なるものがありとせば、或は來るとせば、夫は急度無事無事なもので有う、極樂とか天國とか聞く時は直ちに無事無事の所との感想が起り、地獄とかヘル(一)と云ふ間には騒々敷く忙殺せられる所との想像が起る様である、併しソナ我々が現實に見ることの出來ぬ世界の事は今は論ずる必要が無いが、此現實の缺欠多き世界で、ドンナ異變が起て來るかは所謂一寸先は闇の夜といふ社會に在て、まだ一爲すべき事は海山の多く澤山ある世の中に於て、無事無事であることは、眞實太平の瑞相で、結構至極の状態であらうか

今の日本の實際を言ふなら、外交上に於ては一難去て一難次いて來る有様で有て、先日滿州問題が一段落付き、又北京の列國連合談判も漸く片付きソナと思へば、又近日傳ふる所に由れば、露清兩國間に新なる密約が締結せられるといふ、日本は之に對してドンナ挨拶をするであらうか、經濟界に付て見れば、無邊藏相が大威張に威張て、五大臣の反抗に對して寸歩も譲ら無つた時の状態と今日とは決して好況を呈しない、輸入超加は依然として今猶舊の如しである、物價の低落

### 迷信

はまた一容易に底止しない、金融の逼迫は全く同一である、之に對する方策は如何で有らうか、地方の行政、自治體の施政、何れも腐敗し弛緩して整理せねばならぬ事は數年來の宿題である、是等は實に政治上には何れも大問題である此中の一あるも爲政治家の大奮發を要するものであるのには是等の大問題に、人心を新にする如き施設は一も無く、其大方針すら茫たり漠たりといふ次第、政黨の云爲も頓と分らない、ドナラも無爲無事で落付いて居るのは、我々何となく不安心の思に堪へぬ譯である、眞實無事の日には無爲であるは素より其筈であるけれども、斯る大問題が山積して居るにも拘らず安閑と濟して居るのは、國民の耻ではあるまいか、有爲なる國民の榮譽ではあるまいと思へる、臥薪嘗膽などいふ語は決して遠東半島還附の當坐二ヶ月や三ヶ月で暇を出すべき文字では無い、今日杯も此四文字は十分活して働せねばならぬ、然るに山程もある仕事を控へて居りながら、強いて何事も爲さずして太平の瑞相であると楽しんで居るは大なる油斷と言はねばなるまい、けれども強ち爲政の局に當る人々のみを咎め立てする譯にも行かない、我々の目から見ると國民全体が皮相の太平に酔うて居る様に思へる、其證據は近來頗る

の隆盛なるので分る、聞く所によれば或る西洋人は我日本を迷信の代表國である、迷信の巢窟であると罵倒したといふ事であるが、實に尤である、西洋と雖も全然迷信が無い譯では

### 政教時報第五十八號目次

- 社説  
● 日常の道德…………… ● 刺殺  
● 我邦維新以前の慈善事業…………… (安達愚佛)  
● 社交上に於ける僧服…………… (青柳快庵)  
● 先德餘香(其五)…………… (文學士 本多高陽)  
● 北京信通…………… (吉本婉雅)  
● 憂ふる人のために…………… (多田 鼎)  
● 星亨氏の兇變 ● 宗教と殺人罪等

### 本誌廣告

- 一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす  
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず  
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事  
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無送送料
● 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢				國

- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事  
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし  
東京市本郷森川町一番地

### 發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十四年七月十四日印刷  
明治三十四年七月十五日發行  
發行所 東京市本郷森川町一番地  
印刷所 東京市本郷森川町一番地  
清水朝太郎

ない、十三人といふ数を嫌ひ、金曜日に會合をするを嫌ひ、屍戸を火葬にすれば靈魂が救済せられぬと考へるなどいふ迷信の話は能く聞く所である、其他迷信のあることは決して少くないと聞いて居るが、日本の如く甚しくはあるまい、日本人の血管中には餘程迷信の要素が多量に通じて居ると見て、隙間さへ有れば迷信が油然として湧いて来る、

日本の歴史殊に平安朝時代の歴史を一瞥した者は、誰しも當時迷信の盛で有た事を知てるであらう、當時佛教は盛で有たといふが、眞正の佛教は寧ろ沈滞萎靡して唯迷信のみ跳梁跋扈して居た、病が有れば醫者よりも先僧侶を招いて加持祈禱をして物の怪を禳はせる、紫衣を纏ひ牛車に乗りて揚々得々と晏御然としてぬり込む僧などは決して徳が高いでも學が博いでも無く、唯祈禱に慣れて居るだけである、戦争があつても、地震があつても、水旱疾疫悉く此種災禍の祈禱をなす、これを除いたら、平安朝の佛教で候とて人前に出せるものは何物も無い、其時分の人達は都より踏み出すこと一步なれば、盜賊横行して掠奪を恣にするし、又諸國の豪族が皆其郷曲に據りて、朝命をも受けぬ程なるに、神祇公卿達は戀歌の贈答に日を暮らし、歌舞管絃の遊びに夜を明して居た、何ぞと言へば占て貰たり祈禱をさせたりして迷信に耽りて居た、夫で遂に鎌倉時代に至りて政治宗教共に大改革を要した、しかしこれも太平が四百年も續いた間に、こんな世の中と成たのである、無爲無事を樂んで居た際に迷信が頭を擡げて來たのである

明治今日の有様は如何で有らうか、迷信の隆なことは決して平安朝時代の比では無い、維新以來一方に於ては智識が頗る進歩して、社會は面目を改めたけれども他方を見る時は、迷信的團體が殖ゆるは殖ゆるは雨後に雜草の生するよりもまだ甚しい、蓮門教會、天理教會、黒住教會、御嶽講、丸山講などは其重なるもので、其他何といひ賑といひ賑といひ敷へ立てをするならば、連も手足の指を折り盡してもまだ足りない有様である、夫ばかりでは無い、成田の不動尊といひ、川崎の大師といひ、豊川の稻荷といひ、三尺坊や半僧坊や吞龍上人や道了様や、詮じ來れば皆是維新前後から、盛になり出したのである、永の年月の間左程繁昌もし無つた神佛や行者などが此三四十年來斯くまで繁昌を極めるのは何の譯であらうか、斯程澤山迷信の問屋は有るにも係らず、近來東京でいへば、上流には阿牟波羅摩とかいふむつかしい名前の依體の知れない一種の信仰流行し出して、何大臣の夫人が熱心であるとか、何爵某が一生懸命であるとか、紳商何某が熱い信仰であるとか、其の通りでは無いが知らぬが、何にせよ凄しい勢である、下等社會には羽田の穴守稻荷は此一兩年非常な盛大なことで、參詣人は日々絶え間の無い景況である、迷信界には決して不景氣は無い、其他觀相術とか、周易判斷とか、骨相術とか、姓名判斷とか言て、巍々たる大夏高樓に住て、貴紳の馬車人車をして門前に市を爲さしめる、所謂其道の大家よりして、路傍に露店を出して手紋や人相を見る連中に至るまで皆々其店頭の繁昌することは意想外である、或る大政治家の出

處進退すら九星の法則によりて運動すると評せられる様に成た、實に怪しからぬ世の有様である、現世の榮耀榮華に耽るは人情の弱みであるとは言へ、僅か二十年や三十年の太平に酔うて前後も忘れて、只管現世の榮華に執着して、愚にも付かぬ迷信になづみて、堂々たる人間が狐狸の奴隷となりて、うろたへ廻りて本心を失ふた沙汰に及ぶとは、淺ましいと言はうか、氣の毒と言はうか、實に惜けあい次第である

我國の歴史を通観するときは何時の世にも迷信の勢力は意外に強大で有て、佛教の盛なる時は、此迷信が佛教の皮を被て出て來る、神道の勢の時時は神道の名義で以て頭を上げる元來佛教が斯る迷信を許さ無い事は勿論であるが、神道と雖も我國固有の神祇道に於ては、矢張り決して迷信を本とする今日の俗神道の様なもので無い事は明かである、然るに神佛の好名義を犯して迷信の流行するのは我國民の元氣に取て少からぬ弱點である、實に我日本人の血管中を走る、腦髓中に潜む最大弱點である悪魔である、斯る悪魔に魅入られては夢の如き太平に酔うて無爲無事に安んずるは無理では無い、我々は科學哲學宗教等の方によりて此迷信の剷絶に力を盡さねばならぬ

には、癡病院と施樂院あり、貧者孤者の爲には悲田院あり、又衆人に精神上の慰樂を與るが爲には、大講堂の設けがあつて、釋尊が時々お弟子や信者を連れて來られて、お話しがあつた、其お話の筆記となつて残つてゐるのが給孤獨園所説のお經であつて、中々澤山ありますと、是は某高僧の直話であります、

前に述し如く、四天王寺の組織は給孤獨園に擬して建たものであるが、内部の組織は如何なる有様でありしかは不明ではあるまい、何か書籍にありませうか、愚佛は未だ之を知らぬ、又之れが何れの時代まで繼續して居たかは、中間の事は未だ明らかならず、北條七代時宗の時に當時有名なりし忍性師を以て、四天王寺の主務とした事がある、是は忍性師は非常な人物のみならず、各地に非田院癡病院を建立して、多數の窮民病者を救助した處から、天王寺の救濟所を管理するに任命せられたのである、左れば其頃までは儘かに四院組織は繼續してあつたものに相違なひ故、聖徳太子以來凡七百年ばかりは繼續して居た事が明である、其後は何れの時代まで續きしか、天王寺の古書でも調べるとか或は他の書物に委しいものがあるかも知れぬか、徳川になつて以來は、敬田院だけ残つて、今日も依然保存せられて居るが、他の三院は跡方もない、却説四天王寺の四院組織が、時宗の時まで繼續して居た證とし、併せて北條時代の慈善事業の狀態を知るの便に供する爲に、忍性師の傳記中慈善事業に關する一節だけを

論

説

我邦維新以前の慈善事業(承前)

安達 愚佛

其場所の組織は、四個のものから成立して居つて、病者の爲め

掲げしよし、  
靈鷲山極樂寺忍性菩薩の傳記は、律苑僧寶傳、元亨釋書等に  
あるが、何れも大同小異であるから僧寶傳の漢文を和譯して  
記し、善隣誼は忍性、良嗣は其字なり、建保五年七月十  
六日を以て、大和磯城の伴氏に生る、父の名は貞行、母は極  
氏幼にして聰慧群に超ゆ(中略)師履行簡潔にして、世の名  
利を視ること糝糠の如し、散衣蔬食之に處ること泰然たり、  
常に南人の章服儀を講じて、人の絹衣を服するを禁ず、嘗て  
伽羅疾の人を集むること一萬餘、其食を給與し、授くるに八  
關齋戒を以てす、癩者あり手足瘰癧して、行丐すること能は  
ず、師之を憐れみ、曉には之れを負ふて市に至り、暮に負ふ  
て舍に歸り手づから洗摩して、毫も汚穢を嫌はず是の如きも  
の數歳、寒暑風雨の時と雖も止まず、得る所の檀施は、之を  
監獄に散じ、或は罪人の生命を購ひ、或は佛像を購し、或は  
聖教を書し、或は義井を鑿ち、或は橋梁を架し、或は道路を  
修む、又寒者に遇へば衣服を脱ぎ與へ、貧人に遇へば之に資  
金を分ち、盲者を見ては必らず與るに杖を以てし、狗子を見  
ては施すに食を以てし、路に棄兒に逢へば輒ち人をして乳養  
せしめ、又厩を建て、病馬を集め、時々爲めに佛名を書し、  
密咒を小簡に書して、其頸に繫がしめ、年の大儉に逢へば、  
糜粥を煮て以て餓者を養ひ、國の大厄に逢へば、病者を集め  
て之を療す、豈濟世の醫者にあらずや、聖德太子の施藥、療  
病、悲田、敬田の四院を慕ひては、乃ち至る所に療病院悲田  
院を建立し、救養し治療し、二十年の間に痊るもの四萬六千

八百人なりき、副元師北條時宗其所爲を羨なりとし、土州大  
忍の莊を捨て、其費を補充せしむ、永仁二年、勅を奉じて  
四天王寺の主務と爲す俸餘し以て悲田、療病院に益す(以  
下略す)  
右の傳記に依て觀れば、天王寺には悲田、療病、施藥院等の  
設けあるも、適任者なきが爲めに勅命を奉じて、忍性師をし  
て同寺の主務とした、師は俸給の餘りを以て院の費用に充て  
、益したと云ふのであるから、此時まで繼續して居た事は慥  
かに見えて居る、  
又爰に最も面白く感ずるのは、忍性師は元來眞言宗の人であ  
る、天王寺は淳和天皇の天長二年太政官符を以て天台宗と定  
められて、以來は天台である然るに異宗の忍性師を主務に勅  
命せられたのは、最も妙に感ずるので、全體宗旨の争は中々  
甚しいもので、同じ宗旨でも三井寺と叡山は常に争て居た位  
であるから、他宗のものを寺院の主務とする事はたどひ勅命  
にせよ六ヶしい事であるにも拘らず、此任命ありたるは、全  
く忍性師が、救助事業に對し非常の經驗と功勞があり、最  
も適任者と認定せられ、當時此他に天王寺の救濟事業を主宰  
すべき人物を得なかつたから、誰も異議を挿むるはなかつ  
たものと見へる、  
前の傳記の中に、療病院二院を立て、痊る者四萬六千八百  
人となるが、全體療病院は病者を收容し、悲田院は孤兒や窮  
民を收容するものであるから、此痊るものどあるは各院より  
出院したる者と見てよるしいと思はる、何となれば若し此痊

るといふ字と病者の病が痊たもののみと見れば、悲田院から  
出たものは一人もない譯になるから、病の痊たものや、又貧  
窮原因の痊で二十年間に各所の各院から、出たもの、數が是  
だけであるといふ事に相違ない是が實に驚くべき數である、  
東京市の養育院の報告を見るに、創立以來三十年間年に依て  
收容者の多少はあるけれども、随分大組織であるにも拘はら  
ず、出院した者は、五千餘人であるが、是に比して見ても此  
十倍であるから驚く大事業をしたもので、當時異宗の人を以  
て主宰せしめても、異論の出ぬのも至當の次第で、斯る人に  
對して誰も異議の挿み様がないのであらう、

### 北米合衆國の帝國主義

風氣至洪雄

ワシントンが獨立の柱礎を築き、リンコルンが畫粹に結構  
せられたる平民共和の大合衆國、爾來時代と境遇の變遷につ  
れ、漸時其國是を革むるに至りぬ、昔は一に「モンロー」主義  
を遵奉し、近比専ら帝國主義を採擷するあるは夙に世人の知  
る所なり、吾人は近着「アレナ」誌上の帝國主義なる一文を讀  
み多々益々其感を深くす因りて茲に其抄譯をなす。

字彙編纂學者の吾人に教ゆる所に據れば Imperialism なる  
語源は遠久拉典の働詞 Impero 支配する、又は名詞 Imperium  
政府、Imperator 統治者なる語彙より派生せる者なりと云  
ふ。則ち最強權若くは絶對的統治者の謂なり。而して今や

Imperialism なる一語は帝國と稱する政府の特長を詮表し  
Impero は其文武兩道に關する最高管轄者を義とす、史乘此主  
義が著しく其頂點に到達せしは彼のシーザーが樹立せる羅馬  
帝國なるは等しく學者の定論する所、彼は當時の元老院が支  
配に懸る共和政府を徐ろに變廢し遂に其大帝國を構出した  
り。かくてシーザーは外征戰捷の積勢に乗し、國內の士人を  
籠絡し、遂に政府を篡奪し帝冠を戴くに至れり。  
近來米國共和政府が往古シーザーの羅馬帝國の徑行を辿り  
同一の進行をなすつゝあるは隠れなき事實なり。彼等統治  
者が外交内治に對する執政上の趨勢は其主義を勵行しつゝあ  
るは覆ふ可らざる事項なり。

千八百九十八年米國が西班牙と戦局を結ぶや巴里城下、米  
國媾和委員は西國委員に交渉すらく西半球上其の領土を棄却  
し而して全ヒリッピン諸島は我に割譲す可しと。其要求を容  
られ、此准は交換せられたり。彼等ヒリッピン諸島人は其當初  
米國の有に飯すと云へども、獨立自由及び自治は毫も本國に  
異なるなしと信せり。而も其事態や實に然らずして文武の政  
權一に本國の命に服従せざる可らざるに至りぬ。是に於て  
か、諸島人は其非を鳴らし獨立自治以て島内を維持せんと呼  
號したり。茲に米國は其不當を口實とし征服を加へんとせり  
而して之をなすや米國政府は之を諸州の議員の賛否すら經ず  
して統治者身自ら獨斷以て決行しぬ。是れ明に共和政を无視  
せる否な、非立憲的帝國主義の實施に非ずして何ぞ。  
當時元老院議員ホウア氏は議場に公言して云はく、ヒリッ

ピン島は我合衆國の統治の下にあるも、我國は其島を統治するの權能を有せずと、而して當時の大統領の行動を目して專制的君主と痛罵するに至れり。是れ合衆國の國是に至當なる云爲なり、之れ故リコンロンの大神神なり。

之を要するに大統領の過失は(一)開戦夫自身已てに國法に背違したり(二)諸島人民の承諾を得ず、而も彼等の反抗に逆つて自國の權威を逞ふせしこと也。

キニバ事件も又其尤も酷烈なる帝國主義を勵行せるものなりと云ふ可し初めキニバ國人の西班牙の苛政に虐せらるゝや、合衆國の大統領已下、元老衆議兩院憐愍の心情よりキニバ孤島を自由と獨立の德澤に沐浴せしめんとし遂に西班牙の不法を名として義戰を擧げ之を破斥しぬ。之が爲め一時キニバは獨立と自治の天地を保全したり。而も其舌根未だ乾かざるに已てに米國は無法なる壓制を加へ、意外の拘羈をなしたり。彼米國が此壓制と拘羈を加ふるの口實は彼等は身自から獨立と自治の經營をなすに不可能なり、勿論キニバ國人は外に對して獨立を保ち難く内にありては自治の制を立す可らざるならん。然れ共、彼米國がキニバ國の保全を擔保するや其建國已來の歴史を顧みず、其邦勢の如何を察せず、妄りに米軍の將校の思ふが儘なる政度を施行せり、而して本國の兩院は又之が後援をなしたりしに非ずや。

蓋し思ふにキニバ事件に關しては、政法學者の意見に據れば米國が卒先以て此事に當るは英獨等の諸國よりも急なる可らず。換言すれば米國は、英獨等の諸國よりも利害上關係少

なし。故に彼等は諸國よりも比較的干渉するの用なきなり。然れ共彼米國が人道に據り憐愍の至情よりなせる行動なりとせば、單に小國に臨むに強國の法度を施設する其愚や笑ふ可し、而して米國はかゝる政策を採れり。

シャストン、ベイカー氏云はく「無法なる法律的干渉は屢戰争の近因を惹起し引ひて、殘忍を極め、鮮血醒さく以て歴史に汚點を止むるものなりと、是れ這般の真相に該當するものなりと云ふ可し。

彼米國は其當初此等キニバ島の獨立安寧を擔保すると公言して云はく其國益を増進し、其政度を改善す可しと。而も日尙久からずして、奇怪にも附庸國の劣遇を以て取扱ひ、否な壓制の手段、拘束の政策を執りぬ。吁何ぞ夫れ食言の甚しき。

米國が外に對するの政策夫れかくの如し、若し夫れ其内治に至りては更らに其甚しきを致す。

米國は平民主義の國土なり、共和平等の庶民なり、故に純朴なり、質素なり、大統領は庶民の中より擧げられたる一時の行政官に過ぎず兩院議員は平民の間より撰れたる暫時の立法官に過ぎず。其間際毫も懸隔ある可らず。何ぞ貴賤の別あらんや。是れ其建國當初、ピユリタン教徒等の祖母の苛政に堪へず本國の腐敗に忍びず、去りて海外の新天樂地に移住せる所以に非ずや。然るを、近來合衆國に行はるる階級制度貴賤の懸隔何う夫れ建國の國是に違背するの甚しき。

加之彼等大統領の就任式等の執行せらるゝや華麗なる饗應

壯大る舞踏の爲めに散財せらるゝ巨萬の費用、破産を捨ると毫も異なるなし。彼等は之を以て庶民の膏血をしぼりて財産を徒費する唯一の好機會なりと信せり。茲を以てシカゴ共和黨の機關時報等は之を稱して「モツケリー」と罵るもの決して過言にはあらざる可し。若し夫れ如此にして経過せば將來の合衆國は必ず成功ある強力の大帝國となり了はる決して難きらざる可し。而して共和の庶民は此危險を左視傍觀す可きか。

昔は羅馬共和政治一シーサー出でて頗に最強帝國となりぬ。今の合衆共和政體何ぞ頗に最強帝國とならざるの理あらんや。

社 會

現内閣の宗教法案に對する感情

曾て山縣内閣の時一たび粗漏杜撰なる宗教法案を提出し宗教界を動搖せし以來、内閣の更迭と共に宗教法の制定に付、いたく世人の注意する所となり、前伊藤内閣の時宗教法調査の噂をさくのみにして、遂に議會に提出せざりしは國事多端の爲めか、將た山縣内閣の失敗に懲りて提出を見合せたるか、兎も角伊藤内閣は宗教界に手を出さざりしは智と云ふべし。

思ふに現内閣は山縣系統にして宗教法案と最も關係を有するもの、今の農商務大臣平田東助氏は時の法制局長官にして、之が起草者ともいふべく原案通過に極力盡力したること

は世人の風を知る所なり、また現内務大臣内海忠勝氏は京都府知事たりしを以て、山縣内閣の命によりて東本願寺を欲制し、石川舜台師を抑壓し同師の東上を喰ひ止めたることは隠れもなき事實なり、然るに内海氏事の不可なるを見るや憤然として東本願寺の財政顧問の責任を辭せり、東本願寺を怨みとするや知るべき也。

今や當時の宗教法案の關係深き人々が入りて政府最高の樞要地に席を占めぬ、今期議會に宗教法の提出を見るや否やを論ずるは稍々早計に似たりと雖も、宗教法案に對して當路者が頗る不快の念を懷きつゝあるは、強ち吾輩の憶断にもあらざるべし、偶々宗教法案の當時を想出して茲に一言を費すも無用に非るべきか、因に云ふ東西兩本願寺合同して宗教法提出すべしとの事二三新聞に見へたるが是れ恐くは事實無根の説ならむ、若し果して合同し得べくんば教界の慶事たるを失はず

喇嘛僧の渡來

今回東本願寺出身の北京通譯官寺本婉雅外二三氏は、蒙古統轄者たる北京雍和宮大喇嘛阿嘉呼圖克圖及西藏派遣の總教習大 布喇嘛一行七名と共に本月二日北京出發、同八日馬關に着直に京都へ向ふ筈なりと

元來喇嘛教は清國に於ける一種の國教にして、皇室より特別の待遇を受け、特別の權利を有し、同教の性質として排外

本氏は喇嘛教の本地たる西藏に入りて之が研究に従事せんとて、非常の熱心と、非常の苦心を以て且つ幾多の手段を以て探險の途に上りしも、西藏國境に入る關門堅く鎖して翼なくしては容易に入ると能はず、多年の苦心空しく入る能はざりしは世人の知る所なり

今や西藏は政治上露國の保護たらんとする風説あり、風説俄に信すべからずと雖も、滿州の經營を抛棄したる露國は他に何物を見出さずんば、彼豈に容易に滿州を抛棄するものならむや、傳言をなすものあり、露國にして西藏を領するも政治上の問題を惹起する價値なかるべしと、然れどもこれ皮相の見にして將來の亞細亞問題を解釋し、且つ實行するに當りて西藏を以て焉を度外視すべけんや、思ふに露國は如何にして彼の排外思想の盛なる西藏に入りて懷柔策を施せしか、余輩の聞く所を以てすれば露國は初め喇嘛僧を手引として内地に入りしとの事なり、外人の宗教を利用する手段に至ては邦人の遠く及ばざる所なり。

吾輩は喇嘛僧の渡來に付ては政治上より之を立論するを好まず、暫く宗教界に付て之を觀察すれば相互甚だ利益あるを信す、彼等の來遊は日本佛教徒と一層の親密を招ぐのみならず、是より彼等の媒介によりて邦人が多年の宿志を遂ぐべき西藏探險の端緒を得ると益し疑を容れざるべし、一方には彼等の來遊によりて彼等自身の頑迷偏見なる志想を打破し、彼等の志想界に一展開を見るは吾等の固く信する所なり、且つ最も喜ぶべきは日清間の悪感情は益々薄らぎゆく是也彼等

何なる見損ひをなしたるか不淨の者近くると能はずとて遂に而會せずして止みたりと、これ彼れか本性を悟らるゝを恐れしによるや明なり、而も滔々たる上流社會彼の爲に愚弄され迷夢尙覺めざるに至ては迷信の害も此に至て恐るべき哉尙彼の素性を詮索し來れば厭ふべき罪惡の彼が身邊を纏ひつゝありと、かゝる人が立教開宗の祖なりとせば天下奇怪なるものこれより甚しきものなからむ、咄々怪事

### 感化法施行細則の制定

數日來内務省に於て開會したる參事官會議は、此頃漸く結了したるが同會の議題は去る明治三十三年三月を以て發布せられたる感化法施行細則の件にして遂に同則十七條を制定し近日閣議を経て發表せらるゝに至るべしと又同法の實施期は各府縣知事の申請に依り内務大臣之れを定むる筈にて未だ之を施行したる府縣あらざりしも先年英照皇太后陛下崩御の砌り各府縣の慈善事業御獎勵の思召を以て御下賜相成りたる金員もあれば近日同法を實施すべき府縣少からざるより今回其施行細則を制定せる次第なりと聞く

### 犯罪者と宗教

犯罪者は必ずしも宗教心なしと云ふべからず或場合の如きは最も信仰に富める者の慣習犯者たるあり是を以て或る者は云ふ宗教は犯罪を豫防するの効力を有せざるなりと、これ素より一朝一夕の論議のよく盡すべき問題にあらざる也

の來遊以て證とすべし。

左に掲ぐるものは寺本婉雅氏より馬關發の端書なり  
(前峯)本月二日北京發、高砂丸にて本日(八日)當地(馬關)着、廣島に兩日滞在、來る十一日京都に向ふべき心組に御座候、今回の事は東亞問題に關連して〇〇〇〇〇〇〇に出でたる者 有之候、從て西藏及蒙古文學研鑽并に喇嘛教と本邦佛教との聯絡等に於て不少利益あらむと存候、去年小子が殊に從軍中に得たる西藏經典數百部も數日中に東京へ送附可任心組なれば、是や彼に付き多少の興味を有するならむと存候ま、御報道申上候云々

### 阿訛婆羅摩に付て(再び)

本誌前號に於て阿訛婆羅摩と記せしは誤聞にして實は阿訛婆羅摩と稱するものなりと云ふ  
新聞紙上傳ふる所によれば、彼は小石川目白邊に宏壯なる邸宅を新築せり其費用三萬圓は北海道の豪商山縣雄三郎一個の寄附に係れりと

阿訛婆羅摩は未來を豫告すると百發百中、曾て山縣雄三郎所有の行術不明の船を相し遂に其所在を明白ならしめたるを以て、其返禮として新築家屋費は彼の手によりて支辨されたるなり

彼は愚民を迷すとを目的とするものにして、少しく文字あるものは絶對的に之を叱して近けずと云ふ、曾て河野廣中夫妻精進沐浴すること三日間後相携へて彼を訪ひしに、彼は如

吾等は之を事實に見るに北陸三縣即ち石川、富山、福井の三縣は宗教の最も隆盛なる地とす、此三縣の犯罪數を他縣に比較するに三縣を合して其數他の一縣の犯罪數と大抵同様なりと云ふ、此等の事實上より觀察すれば宗教は決して犯罪を豫防するの効なしと斷言するの不當を認むる也、知らず吾等が言當れりや否や

### 教導講習院卒業生諸氏を送る

東京に移轉し組織を改正し面目を一新したる教導講習院今回はしめて第一回の卒業生數名を出しぬ、吾等と縁故深き教導講習院より前途多量所謂濟々たる多士を出し、は吾等の深く喜ぶ所也、若し夫れ全力を注ぎたる本會の近角氏をして此盛況に列席せしむるを得ば同氏の感果して如何ぞや教導講習院の移轉は巢鴨監獄教誨師問題が動機とされるは今更ら事新しく論する迄もなし、世に布教師多しと雖も多くは賣僧の徒にして正式の學課を踏み相當の學力を有するものなし、布教師の養成豈一日も苟にすべけむやこれ教導講習院が大なる抱負を以て東京に移轉し來れる所以、思ふに近角氏の意も亦茲に出でざりしならむ果して然らば今回の卒業生諸氏は非常の責任を擔ふ者、今後社會の活躍に對し、粉骨碎身、其職を盡さるべからず、然れども其職を全ふするに當り徒に他によりて成功を期するが如きは、吾等の望まざる所なり、人各々自主自由の意志あり乍ら猥りに他より強制され左右さるゝとあらば、何れの時か羽翼を張るを得んや殊に布教上に

貴ふべきは品性の高潔あり、一私私念を交へざるにあり、かくして思ふまゝに衆人を感化し萬人の師表となるを得べし

吾人さく、講習院廢せられて真宗大學に合せらるべしと、吾等は廢止問題に付ては言ふを欲せず、只諸子が社會に於ける一舉一動の行爲は、凡て講習院の面目に關す、即ち諸子が社會に於ける効績の顯るゝに至らば講習院の廢止を悔るの時あらむ、諸子の責重且つ大なる哉、一言以て諸子を送るの辭となす、稿成るの後偶々海外萬里の近角氏より消息を傳へらる、諸子請ふ意を安せよ

無料宿泊所人員表

本誌前號に記載したる無料宿泊所の精確なる人員表を得たば左に掲ぐ

自明治三十四年五月 至同 年六月 無料宿泊所宿泊者人員表

業務を興へたる者	養育院へ入院せしめたる者	共済慈善會へ送付したる者	福田會育兒院へ入院せしめたる者	東京感化院へ入院せしめたる者
大人 一五	大人 〇三	大人 一〇	大人 二〇	大人 一〇
小人 〇〇	小人 〇〇	小人 〇〇	小人 〇一	小人 〇〇
男 一五	男 〇三	男 一〇	男 二〇	男 一〇
女 〇〇	女 〇〇	女 〇〇	女 〇一	女 〇〇
小計 一五	小計 三	小計 一	小計 三	小計 一

紛々録

◎學生數名相會するあり、曰く私設鐵道は吾等の爲めに割引券を出すも官設に至りては然らず、是を以て吾等は鐵道國有を不可とす、これ學生の經濟上より觀たる國有不可論、時に取りて興味ある笑話と云ふべし、

◎阿訛婆羅摩起り、喇嘛僧來り、モルモン宗來らんとす、日本は實に世界宗教の博覽會場たらんとす、

◎近日東京區裁判所か下したる判決文こそ中々面白けれ、其要旨に曰く、賤妓を弄し、陋劣の遊興をなしたりとて、今日社會の狀態に於て別に名譽毀損の行爲にあらざり、即ち惡事にあらざり、醜行にもあらざり、云々

◎右の判決文によれば社會一般の氣風が既に墮落し來るを以て、賤妓を弄するか如きは收て醜行にあらざる故、其罪を問はずとの意に解せらるゝ也

◎思ふに裁判官なるものは時流を趁ひ、社會の氣風に從

淺草警察署に引渡したる者

大人	一〇
小人	〇〇
計	一〇

宿泊のみせし者

大人	二一五
小人	〇〇
計	二一五

備考

計	二三九
---	-----

ひ、法律を適用するにせば、法律の神聖何を以て保つべきや

◎今日の法官罪道徳眼の低きものなかるべし、勿論吾等は道徳の涙なきを咎めず、去れども社會道徳を無視する如きは、全然反對の意を表するもの也

◎大日本佛教青年會講師として、年々出席したりし默雷上人は京都本願寺夏安居の爲めに見臺を叩かん爲め、青巒居士は地方に遊説中なるを以て、本年二講師の出席を見ることを得ざるは聽講者の遺憾とする所ならむ、

◎殊に青巒居士は教界の大立物として持嚙さるゝ丈、一層残りおしく感せらるゝ也

◎南條、村上、清澤、宗演、前田師等の諸大徳續々出席せらるゝを以て盛會想ふべき也、殊に長野市有志諸士は非常の熱心を以て諸般の準備に奔走せらるゝ由、本部より眞岡幹事は既に出發の途に就きぬ

◎乃木中將第十一師團長たりし時、基督教を以て囚徒を教誨するの適良なるを認め、衛戍監獄をして之れに據らしめしが、或る時陸軍省の理事同監獄を巡視したる折、監獄長が法服を着して本式の祈禱を行ひつゝある現狀を視て、大に驚き、直に大臣に報告し兒玉陸相猶豫なく乃木師團長を詰問し、數回應答の末遂に休職の命に接せしとの話

◎監獄教誨師現在の總數百六十人、外に囑託三十一人あり、大抵東西本願寺の僧侶にして、耶蘇教傳道師は例の巢鴨事件以來一人も在らず、尤も仙臺には宗教家以外の道徳家

を任用し居れる由

◎監獄囚徒の日曜半日休は、初め來年度より日曜日の休業を全廢せん等なりしが斯くては教誨、理髮、洗濯等の時間に差支ありとて、先づ半日休業せしむることゝなれり、其結果作業收入に於て約九萬圓の増收となる由

◎警視廳未決監に居る一人、寒中に眞裸となつたり、鼠を食ふたり三年を過して居る由、伴狂か、眞狂か、伴狂ならば吾等其耐忍力に驚かざるを得ず

◎紐育州トロイ三位一體美以美教會の會堂、此頃火災に罹り烏有に歸したるが、同地の猶太教會は之を氣の毒に思ひ、當分其會堂の使用を同教會に許したるより、其好意に隨ひ日曜日の教儀を同教會に行ひつゝある由、歐米宗教界反目の志想は漸々其跡を絶ち來り、宗教思想の自由益々發達を見るに至る

雜錄

先德餘香 (其六) 本多高陽

◎南溪、龍温、介石三師 南溪は眞宗本願寺派に在て近代著名の學匠である、龍温は眞宗大谷派の學匠で在て、共に明治維新前後に於て學頭職に在て、此時分佛教界の明星で在た、介石は先にも紹介した佐田介石翁である、是も始めは西本願寺派の僧で有たが、後には色々轉宗した、年齢は南溪最長

龍温之に次ぎ、介石は餘程年下で有た、或時三人打寄りて何々の話を長時間して居られたが、年は争はれぬ者で、下

●本法院義讓講師 三河幡豆郡横須賀の源徳寺の住職であるが、元來は尾張海西郡赤目村に於て、僧衣を裁縫する家に

●佛儒の争論 義讓講師の從弟、佐藤楚材といふがある、牧山と號して、近代稀な鴻儒で清朝史略を始め澤山の著書がある

私儀今日死去致候間此段御通知申上げるとの文意の通知狀を認めて居りながら、眠るが如く入寂せられた、因にいふ洋服の上へ袈裟を掛けて演説したのは老師などが始りであらう、

◎理綱院慧琳講師 は高倉大學寮三代目の講師で、當時は學寮も創設の際故、萬事不整頓で有つたが、理綱院は其改進に就て力を盡されたとは非常なものである、講師がまだ少壯の頃生國伊勢より京都へ赴くとて、近江の湖水を渡られた、其同舟中に禪僧が二人居りて、講師にからかつて言ふには、御前さんは何宗であるかと、講師は答へて念佛宗なりと、禪僧が言ふには念佛宗なら問ふ事があるが、善導大師が念佛を唱へると一聲に佛が一體づゝ顯れたといふが、實際念佛が尊いものなら誰が稱へても佛が顯れるべき筈であるが、一かど問ふ、講師曰く夫は確に顯れるに相違無いと、禪僧曰く夫なら小僧さん御前稱へて御覽とて責めて措かず、師曰ふ今稱へるから、シツカリ見てお出でなさい、サア宜敷いか、南一佛、夫佛が一體顯れただらう、否見ぬ決して顯れ無つた、若し顯れたといふなら今一度稱へて見よと責む、師言ふ夫なら今一度稱へるから今度は見損ひてはならぬよとて、サーエーか南一佛と言て夫れ此通り佛が顯れたと、禪僧猶顯現せずと主張す、師言ふ貴僧方は何宗で御坐ると、二僧言ふ我輩は禪宗で御坐ると、師言ふ禪宗の祖師達磨大師は一本の葉に乗て、大海を渡りて支那へ來られた、誠に禪道に達した者なら、達磨サン様の様に一葦に乗て大海を渡る筈であるに、今貴僧方は僅かコシナ湖水を渡るに船に乗り水手を頼んで漕いで貰ふ

擲ちて儒生となるべし堅く約して、議論三日に亘り遂に牧山先生屈服して佛敎を聴き、佛學を學び遂に無二の念佛行者となられた、義讓講師示寂の後、神守空觀師を仰いて法を問ひ、先生の老後は口念佛の聲を絶たれない程で有たが、明治二十年頃目出度往生を遂られた、

◎坦山老師 あれが本當に悟を開いたのかドウかは知らぬが、病惡同原説を主張し、佛仙會を起し、其言行何となく垢抜のした坊様で今の俗僧輩とは選を異にして居た、上野廣小路裏通に小さな借宅をして居て、如何なる貴顯の人が來ても平氣だ、暑中などは裸體で特鼻禪一つで心地よげに晩酌を傾けて居られ、人の訪ひ來るあらば直にオイ一つドグと箭を指す、其無邪氣加減何人も其裸體の挨拶を見て無作法などいふ氣は起らぬといは、迎も學んで及ぶべからずである、

◎事務取扱 曹洞宗が越山と能山と分離とか非分離とか大騒動をした時分、管長の命令も行はれぬから、一時内務省は之を應じて事務取扱を置いた、其時坦山老師事務取扱に成たが無頓着の者で、分離派の者來て捺印を求むればオイ善し、非分離派の者來て調印を請へば則與ふ、扱兩派の者内務省に至れば、双方共に事務取扱の捺印あり、双方相見て呆然たりといふ有様で、内務省も喧嘩する坊様達も之れでは仕方が無いとて、扱老師の事務取扱は止めたか、皆怒る所でなく大に感心したこのことである、

◎死を前知す 昔から高僧の傳には死を前知した人は澤山あるが坦山老師の如きも其一人で、死ぬ前に葉書を買はせて、ソナ未熟なことでは連も佛體は拜めぬも道理である、夫では幾度念佛を稱へて何程佛體が顯はれても貴僧方に拜めることは無いから駄目である、ヨシマンヨ〜と意氣昂然

信 界

無我觀

佐々木月樵

無我觀といへばとて、無私の原理を理屈詰に論じやうといふのでない。唯私は實行上より、諸兄と共に、佛敎に談ずる無私の教を味ふて見たいと思ふのである。

日本人は性急でならぬ、忍耐心に乏しい、どうも意志が薄弱でならぬとは、今日何人も認むる所である成程それに違いない。先づ、最も近き處、慥かに私一人には的中して居る語である。私は實に意志が弱く、何かにつきても困ることが多い、是がため、先づ第一に、私は、もの、決斷に苦む。この時に私は他人よりも一層多くの苦痛を感ずる。次に、私は意志の弱さがために、なす事として、何事も成功しない。たとへば、どうも、一樣なる書物などを、半年も一年も、それはかり、繰返へして居れない性である。あれも讀みた、是もよみたくなる、讀書ばかりでなく、すべてが、斯様な風で、自から困ることが多い。二兎を逐ふてさへ、一兎も得られぬといふことであれば、私の様に、あれもやり、是もやりたく三兎も五兎も獲やうと思ふ性では、到底、何事も出来ぬとい



ふことは、一二年前から益々深く感ずるやうになつた。そこで、私は、我不決斷より生ずる苦痛を去り、些少だも、我爲す事の成功を思は、どうしても意志の人とならなければならぬと自覺した。考へて見るに、意志の人は力の人であつて、成功の人なることは、確かな事實らしい。古き諺なれど、「斷じて行へば、鬼神も之を避く」といふ。精神一到、何事かならざらん」といふありふれた語にも、其語の奥底には、意志の人となれといふ教が含まれて居るらしい。然らば、私は、種々教訓と鍛練によりて、我意志を強固にし、たゞい、其なす事に就ては、成功なきは望む事は出来ぬと覺悟するも、せめては、私が日々の應時務物に就き、我不決斷より生ずる苦痛だけなりとも、除却したいと思ふた。

如何がしたらよからるか。少しは書物も讀んで見た、人の教も聞いて見た、工夫も凝して見た、どうも、私は別の方法で我意志を強固にするを發見する事が出来なかつたが、一たび無我といふ佛の教を實行上より味ふて見た時、何となく、得る所あつた様に感じた否な、私は今日まことに、我意志を強固にし、意志の人となる最も容易なる方法は、この無我觀にあるとを自信して居る人である。

無我觀、是れ實に自己の否定である、一見、全く自己の意志を強固にするといふとに正反對であるけれども、能く味ふて見ると、決してやうでない、何せかなれば、私共が、事に照んで決斷が鈍く、何事も根氣強くなすとの出来ぬのは、我意志の薄弱なるに違ひなければ、能く考へて見るに、その

うも、世人の教に賛成するが出来ぬ

この故に、私はどうしても、若し私と同様に意志薄弱の人あらば、その人と共に、無我の教によりて、誠に我意志を強固にせよと思ふ。私は世人と違ふて、我國民が何事につけ、偉大な事業をせぬのは、その意志の薄弱に歸するといはれない。若し、これよりも強き意志があつたらば、益々何事もするとは、出来ぬやうになるだらうと思ふ。我國民中偉大な事業をなすとなきは、意志の薄弱に歸するといふよりも、私は、我國民が、この薄弱なる意志を有するからであると評せざるを得ない。この故に、私は是の如き意志は、是を鍛練して強固にせよといふよりも、寧ろ、その有する薄弱なる意志をも皆な悉く滅却してしまへどす、むしろものである。人のことは知らず、近く我精神上に、考ふるに、我性急であり、忍耐心がなく、すべての事をなさんと企て、永く始めたる一事に專注することの出来ななだのも、或は又事々物々、事に當りて躊躇し、つまらぬ苦痛を感じたのも、無我の教を味ふて見ると、其實、我意志の強固ならざりしによるといふよりも、寧ろ、今は我意志があつたからであると思ふやうになつた。

無我觀は、自己を否定する、隨ふてその作用たる意志を滅却するは勿論である。こゝに、私共は、我はからひ、我判斷を脱却して、一切を佛の心に歸して觀するやうになる。親鸞聖人の「心を弘誓の佛地に樹つ」と仰せられたは、實にこの所を教へ下されたものだと思ふ。事起る、我之を處理せんと欲せば、如何がせんと種々の苦痛も我心に起る、我既に無我

不強固な、薄弱な我意志が、我精神中にあるからである、われもやり、これもやり、すべてのことをなさんとある我意志が、我精神を擾亂するから、我等はすべての事に迷ひ、時々我胸を苦めるのである。然らば、我が此不強固なる意志を有する我精神を否定する、是れ實に無我觀にして、まことに強固なる人となる方法ではなきか。

近頃、意志の教育とか、意育の必要とかいふて、世間では、甚だ喧ましい。が、實際上、我此有する所の意志を鍛練して、遂に不動の域にまで達せしむるとが出来やうか。都合によると、私は之がため非常の間違ひが起らぬか。の杞憂がある。外境に動かされぬ、これ實によきとに違ひない。誘惑に亂されぬ、是れ實に立派な人である。が、然し、實際、かゝる人があらうか。若し幸にあつたとすれば、その人は、誠に立派な意志の人でなくて、我慢の人ではなきか、我情の人ではなきか、我執の人ではなきか、是の如き、人は、如何に能々外境に打ち勝つも、私は意志の人として、之を賞する事が出来ぬ。反て、是れ己が我慢、我執に打ちまけたる意志薄弱の人だといふ「戦争して敵に勝つは小捷なり、己が私情私欲に勝つは大勝なり」とは、トーマス、ブラウンもいふた語で、「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」とは、これ王陽明が嘆息ばかりではない。徒らに我意志を強固にせんとする時は、遂に我慢我慢の人となり終るとが多い、今日の意育とか、意志を強固にせよとかいふは、其結果は反て外に勝て、我に負け意志薄弱の人となり終るの憂ひなきか少なくとも、私はこの見地、少住して、判斷を佛に仰ぐ時、我は何の苦痛もない我如何處理し、如何斷せんと思ふ時、若し佛ならば、是を如何に處理、判斷し給ふかと觀すれば、私は、直に佛より我等にその方法を授け給ふ自信がある。方法ばかりでなく、之をなすの方を授け給ふ自信を有する。我是に於て安く、既に安ければ、心みだりに動かす、隨ふて一事にも專注することが出来る。この故に、私は無我觀こそ、是れ實に意志を強固にする活殺自在の妙法だと信じて居ります。

私は終りに、諸兄と共に、常に左の語を服膺したいと思ふ。「子四を絶つ、意なく、必なく、固なく、我なし」『論語』「一切の境は、喻へば燧なり。我心石の如くすくみて角あるが故に、火出で胸をこがし候。我心綿の如く柔かに、水の如くすくみなく候へば、天下の燧にあたりて火出で不申候」。(中江藤樹)

「佛法には、無我と仰せられ候、我と思ふとは聊かもあるまじきとなり。われはあしと思ふ人なし、是れ聖人御罰なりと御詞候」。(御一代開書)



後生の事一大事におぼしめし候旨、御尤に候。後生一大事なれば、今生はなをく一大事にて御座候。いかんとなれば、今生の心まよひぬれば、後生かならず悪趣に墮する理ある故にて候。佛の後生一大事とおしへたまふも、今生の心をあきらかにせんためにて御座候。大乘の法門は皆この心得にて御座候。あしたゆべをはかりがたき浮世にて候へば、心の中の如來を拜したまはん事、何より以て大切な事に御座候(書簡の一節)

(中江藤樹)

**●入學募集** 來る九月本學各年級へ入學を許す志願者、七月卅一日限り願出べし。入學試験は九月一日より施行す。入學手續は本年五月廿一日の宗報に在り。猶學科表等入用の者は返信料郵券封入にて申込むべし。東京市下谷區谷中真島町

眞宗東京中學

新刊廣告

文學博士 村上專精師述

# 眞俗二諦辨

全一冊

本書は村上文學博士が眞俗二諦の義に付き、極めて平易に、極めて通俗に、極めて明瞭に述べられたもので、眞俗二諦と云へば誰れしもよく承知し居る事なれども、佛敎の本旨を尋ねれば、眞俗二諦の義より外はありませぬ。眞俗二諦と一口に云ふもの、實は八萬四千の法門皆之に包まれて居ると申しても宜し、去は各宗各派の教法は悉く眞俗二諦の二門を開いて弘通したるに過ぎないものであります。先づ本書ははじめに眞俗二諦の語を應用するに至りし濫觴を述べ、次に眞俗二諦に對する一般の概念を興へ、次に聖道門諸宗に互り、次に眞宗一家に限る眞俗二諦を辯ずること、縷々として盡きざるの感ありませぬ、其間諸經を引用して證となし、例を擧げて説明を容易ならしむる等用意周到、少しも遺憾なきものは本書であります。宗敎家は勿論佛敎信者たる者は、必ず本書を一讀せられんとを望みます。

東京市本郷區森川町一番地

大日本佛敎徒同盟會出版部

# 精 神 界

毎月一回(十五日)發行  
○壹部拾二錢  
○壹年壹圓貳拾錢

東京本郷區森川町壹番地三百四十號  
浩々洞

七月十五日 第七號 發行

◎ 競爭と精神主義 ◎ 我等の統理者 ◎ 中江藤樹曰く ◎ 起き上り小法師 ◎ 賣らるゝ者 ◎ 夏の夜	◎ 佛の御名 ◎ 無善無惡 ◎ 實力ある者の態度 ◎ 落第 ◎ 自由平等 ◎ 魂祭	◎ 北遊雜感 ◎ 農業の人、宗教の人 ◎ 煙管師と馬糞拾ひ ◎ 湖畔の青嵐	◎ 星亨氏の死に就ての所感 ◎ 都鄙小觀 ◎ 我等の書室等 ◎ 東京、京都、紀伊、十勝、布哇たより等
吉田賢龍 森内政昌 本多辰次郎 浩々洞註 佐々木月樵	清澤滿之 曉鳥敏 青見堂 陸院夷	多田鼎 仁科幽齋 安達愚佛 近藤杜葉	

文學士 清澤滿之師序  
文學士 近角常觀君著

## 信仰の餘瀝

再版刻成

●定價金拾五錢●特別減價拾貳錢但郵税不要●郵券代用一割増

本書は著者が、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其説く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、紛糾錯雜せる人生問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして受然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ、苟も信仰の飢を叫ぶの士は、必ず一讀せられんとをす、

- 一、宗教的同期。
- 二、活ける懺悔。
- 三、外、柔にして、内、剛なるべし。
- 四、聲をさくべし、光を見るべし。
- 五、我を捨てむと欲すれば捨つる能はず。
- 六、佛の人格。
- 七、地を固く踏めされを常に歩を進めよ。
- 八、信界に於ける監獄。
- 九、詩的信仰は一種の懨懨界なり。
- 一〇、宗教心は最も健全なる常識に外ならず。
- 一一、因果應報は宗教的自覺なり。
- 一二、相對世界の真相。
- 一三、生きんが爲めに働くべからず、働かんが爲に生くべし。
- 一四、佛陀を近きに求めよ。
- 一五、信念に修養は實際問題に如くなし。

發行所 大日本佛敎徒同盟會出版部  
東京本郷區森川町一番地

### 第十回夏期講習會豫告

本會は明治二十五年、東京帝國大學、第一高等學校、慶應義塾、早稻田專門學校、哲學館、法學院其他公私諸學校に在學せる青年佛教徒相集り組織せるものにして、佛教を信奉する青年學生の中樞團體なり、各學校内佛教青年會は毎月數回必ず其例會を開き講話に演說に各道徳上の修養を怠るとなし、而して毎年又夏期講習會を便宜の地に開くを以て例となし、本年に至る迄前後九回、左の各地に開設せり

- 第一回 攝州須磨浦
  - 第二回 東部鎌倉、西部二見浦
  - 第三回 三州蒲郡町
  - 第四回 相州三崎町
  - 第五回 遠州新居町
  - 第六回 東部陸前松島、西部播州明石
  - 第七回 尾州常滑町
  - 第八回 越前國敦賀
  - 第九回 駿州沼津町
- 本年第十回を開くに方り地を東西に下し、西部は伊勢國四日市に開き、東部は信州、長野市に開かん、之を從來の地に比すれば、海風颯々、清波に浴するの快は則ち得難し、雖、此地由來佛緣淺からず善光寺の名久しく人口に膾炙し且附近の勝地又一顧を償するに足る、東京よりする者は、途すがら妙義、榛名の勝を尋ね碓氷の峻嶺を踰え、海面四千尺、輕井澤驛より淺間の活火山を望み、河中島に不識庵機山公の古戰場を踏査し去て埴捨山に上り、千曲の清流を隔て、鏡臺山を仰ぎ、所謂田毎の月を観るも亦可ならずや、若し夫れ鐵路の便を借らば二時四十一分間の行程、直に日本海の北海岸に遊ぶを得べし、健脚の士、講終て後此等の名勝を尋ね、北陸

の山河を跋渉するも敢て妨なし、願ふ、全國の青年諸氏、各地の教報を携へて來り會し熱誠なる信仰を以て、北陸の天地に新生命を興へ、活火炎々意氣斗牛の如く、千山萬岳の間無主義無信仰の徒をして顔色なからしめよ

**講師**  
 井上圓了師 大内青巒居士 南條文雄師  
 村上專精師 山下現宥師 前田慧雲師  
 藤島了穩師 齋藤唯信師 清澤滿之師  
 釋宗演師 守本文靜師 鈴木法琛師  
 日置默仙師 (いゝは順)

**教育講習會**  
 本會に附帶して教育講習會を開き、科目中便宜に従ひ之を講じ會員中學生等之が講師に當る  
 酒生慧眼、本多辰次郎、和田鼎、中尾教嚴、堀謙徳、佐竹觀海、諸文學士

**會期** 七月十六日より二十九日迄二週間  
**止宿費** 一日滞在費金貳拾五錢

**來會申込** は七月十日迄に東京本郷區森川町一番地大日本佛教青年會幹事眞岡渡海宛申込せざるべし  
**地方申込** は長野市西町佛教徒信濃國民同盟會事務所へ申込せざるべし  
**注意** 旅費は東京より長野市迄汽車賃一圓九十二錢

**上野發** 午前六時 午後三時五分 長野着  
**同** 午前八時四十分 同 六時五分 若  
**同** 同十一時三十分 同 九時五分 若

長野停車場前に案内札を出し置くを以て右に御注意ありたし

### 大日本佛教青年會

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部